

多面的・多角的にとらえよう！
歴史をとらえよう！

時代の大きな流れを どうとらえるか



静岡大学教育学部教授 小和田哲男

歴史は常に動いている。ほとんど目に見えないような小さな変化があれば、誰の目にも大きな変化と映る大変革もある。しかし、小さな変化であっても、気がつけば、時代は確実に変わっているのである。極端ないい方をすれば、時代が変化するから歴史がおもしろいといってよいのかもしれない。そのおもしろさを中学生にどう伝えていくか、帝国書院版『社会科 中学生の歴史』の改訂作業にあたって、私も執筆者が一番力をいれたところである。

戦国の終焉と信長・秀吉・家康

私たちが、時代の変化をどうわかりやすく解きあかしているか、時代の大きな流れをどうとらえようとしているかの一例として、ここでは中世末の戦国期から、近世初頭の江戸

幕府の成立期についてみておきたい。

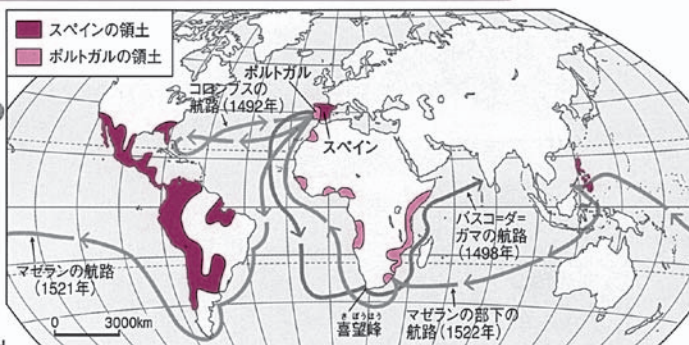
周知のようにわが国は、応仁の乱の火の粉が地方に飛び火する形で戦国争乱の時代に突入した。およそ100年間というもの、毎日のようにどこかしらで戦いがくりひろげられ、「戦国時代」の名前でよばれている。そして、その戦国争乱に終止符を打ったのが、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三人だったこともよく知られているところである。

信長が1582年に本能寺で家臣の明智光秀に討たれたあと、その偉業をうけついで秀吉によって天下統一事業が進められ、最終的に家康によって「徳川の平和」といわれる、戦いのない平和な時代がもたらされた。では、なぜ、信長・秀吉・家康だったのだろうか。各地でおよそ150家の戦国大名が群雄割拠していた状況から、どうしてこの三人によって戦国争乱に終止符が打たれていったのか。そこ



▲① 地球儀を前にした織田信長(奥)とポルトガル人宣教師(手前)

信長： そのほうはどのようにして日本に来たのか。
宣教師： リスボンからゴア・マラッカを経由して来ました。
信長： なに？ われわれが住んでいる大地がまるいと申すのか。
宣教師： はい。
信長： うむ。理にかなっている。



▶② スペイン・ポルトガルの海外進出

帝国書院「中学生の歴史 最新版」p.98

に、時代の大きな流れをどうとらえるかを考えるヒントが隠されているとあってよい。

この教科書では、「大きな流れ」として、ヨーロッパ文明との出会いをとくに重視した。それも、ただ、従来からいわれている鉄砲伝来やキリスト教の伝来といった限定されたことだけでなく、当時、南蛮といわれた東南アジア地域とのいわゆる南蛮貿易が大きく歴史を動かしていたことにふれている。厳密には、イスパニア（スペイン）やポルトガルなどのヨーロッパ諸国は西南蛮とよばれているが、東南アジア諸国・ヨーロッパ諸国との交易が、信長・秀吉・家康の三人の台頭と密接に関係していたことは事実である。

信長が推進した関所撤廃や楽市・楽座政策は、国内の商品流通の発達を促し、足利義昭を将軍にしたあと、義昭からの管領や副将軍への任官を断り、その代わり、堺や近江の大津などを直轄地にすることを要求し、それが認められており、信長のねらいがどこにあったかがわかる。

豊臣政権の施策と徳川幕藩体制

南蛮貿易による恩恵を一番多くうけたのは秀吉だった。ちょうど秀吉が天下統一に乗り出したころ、朝鮮半島から新しい金銀の精錬技術が伝わり、各地の金山・銀山からおびただしい量の産金・産銀があった。わが国のゴールド・ラッシュの時代にあっていたのである。太田牛一の著わした『太かうさまくんきのうち』には、「太閤秀吉公御出世より此かた、日本国々に金銀山野にわきいで…」と、あたかも、秀吉の出世を喜んで、金銀が湧き出したかの書き方をしているが、これは著者の秀吉に対する“おもねり”以外の何物でもなく、実際は、ちょうど金銀産出のピークと、秀吉の全盛期が重なっていたというだけである。

しかし、当時、日本で産出される銀が、世界の三分の一を占めていたといわれており、日常生活でほとんど銀製品を使用しない日本から、南蛮貿易によってヨーロッパへ輸出されていくこととなった。その莫大な利潤が秀吉による天下統一の戦いの軍事費を支え、また、豊臣政権によって行われた太閤検地や刀狩など、国内における諸政策推進の財政的基盤となっていたのである。

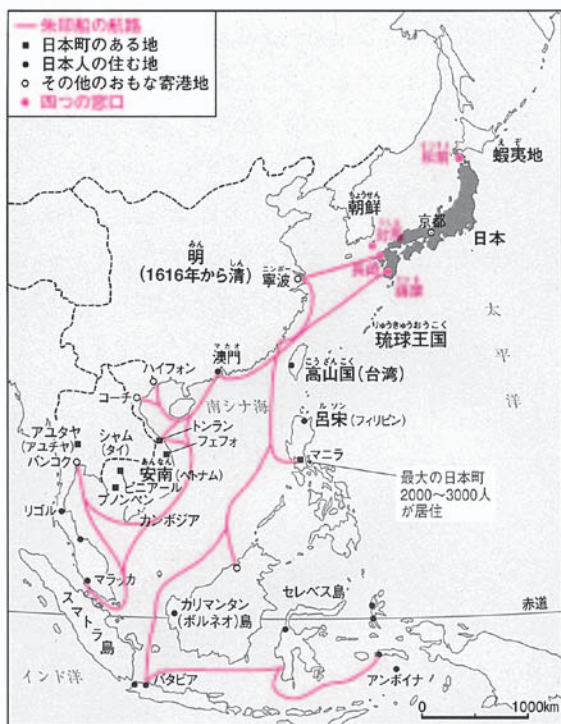
さて、この帝国書院の『社会科 中学生の歴史』では、時代の変化をわかりやすく解き明かす工夫をいくつか試みているが、信長・秀吉・家康の時代でみれば、兵農分離と身分制にかかわるテーマにおいて一つの特徴がある。よく知られているように、中世には、農民も武器をもち、武装することがあった。紛争解決にあたって、農民たちも「自力救済」という武器で戦っていたのである。戦国大名も、そうした武装した農民を家臣団の末端に位置づけていた。

ところが、信長のころから、兵農分離の方向に進む。それは、信長とまっこうから戦った一向一揆が、そうした武装した農民主力の軍勢だったからであり、兵農分離は一揆の否定と連動したものであった。結局、秀吉の刀狩令によってしだいにそれは貫徹する形となる。

そして、実は、この信長・秀吉段階の兵農分離の動きがあったから、そのあとの徳川幕藩体制の「士農工商」といわれる身分制度支配も可能になったのである。単なる歴史の事象の羅列ではなく、「こういうことがあったから、つぎはこうなった」という、歴史の連続面を理解してもらえる叙述になっている。

四つの窓口を大きく扱う

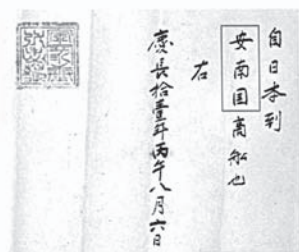
「歴史は常に動いている」と冒頭書いたが、



▲① 日本と近隣諸地域との交通(17世紀初頭)

帝国書院「中学生の歴史 最新版」p.110

あんたあん
安南ってままで
いうとどここの国
にあるのかしら。



▲② 朱印状 (東京都 前田育徳会蔵)



▲③ 朱印船 (東京大学史料編纂所蔵)

それぞれが何の脈絡もなく動いているわけではない。「因果関係」などといえは少し古くさく聞こえるかもしれないが、歴史には原因があって結果がある。その因子から目を離すことはできない。最後に、この点について、南蛮貿易の全盛期から、いわゆる「鎖国」への動きについてふれておくことにしよう。

この教科書では、私たちは「鎖国」という表現を使わなかった。「鎖国」の代わりに「貿易統制」という言葉を使っている。それは、幕府が海外への窓口を全部閉じてしまったのではなく、つぎに掲げる四つの窓口を開けていたことと、幕府が外交を独占していたからである。

具体的に四つの窓口というのは、長崎の出島、対馬、薩摩、蝦夷地(松前)である。この四つの窓で、日本は世界とつながっていたという事実は、「鎖国」という表現では説明できない。

では、大名や豪商たちが自由に南蛮貿易

を行っていたのを、幕府はなぜ押さえはじめたのだろうか。一つは、貿易で巨富を得る大名や豪商たちに対する監督強化である。これは、はじめ、朱印船貿易という形で、幕府が貿易を認めた船に許可状を与えたものであるが、大名統制をねらう幕府にとって、諸大名が貿易で巨富を得ることは好ましいものではなかった。また、「士農工商」の身分制の点からも、豪商たちが貿易で利潤を得るのを制限する必要が生じてきたのである。

もう一つはキリスト教対策である。身分制支配の貫徹のために、キリスト教の教えは好ましいものではなかった。長崎で貿易を許されたオランダと中国が、キリスト教の布教とは無縁だったことが、その間のいきさつを雄弁に物語っているとあってよい。この教科書が、ヨーロッパ文明との出会いの歴史の流れのしめくりとして、四つの窓口を大きく扱ったのもそのためである。